



海峽心鏡

三

大冊  
力  
D

1冊
528
3



明 15  
第  
卷

落葉鏡卷之三



時人傳之內板書

○原予於甲斐國山梨郡之農夫某之妻之男  
姓之者以之其名高代高代留其姑夫十之五後  
少振中之少々々々拾遺子九代以拾遺子九代水小  
滿其死之其傳既之拾遺子九代連拾遺子九代其養子之姑之  
原八拾遺子九代之其傳既之拾遺子九代連拾遺子九代其養子之姑之  
長也其傳既之拾遺子九代連拾遺子九代其養子之姑之

活然堂藏

五とすくはるの義と申す事々々一申すは山部之彦之  
何と申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
老烈と申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
防はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
是はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
一申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も

○大石良雄亦復の城に退く後暫其城を立  
一申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
八女將共同城りてはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
一と申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も

事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
防はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
是はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
一申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
八女將共同城りてはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
一と申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
防はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
是はらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も  
一申す事々々もはらふ事々々もはらふ事々々もはらふ事々々も





予一書後慶安由前の人より申す事一書と  
りて致す所不申と云ふ事ありてあり

あまの人の集りて海を畫して海は三人の海

と云ふ事ありて官にふくむるに以て其の事ありて  
生れりて

一書後致す

嗚呼此の世の情自心して人を知るに  
能く

若しと云ふ事ありて

今更にり世の中に此の世の情を  
知る

音にきく

今更にり世の中に其の兄及弟の同家は仕り

親と云ふ事ありて後難に惟ふ友也秀和小

石通其の喜喜信代家仕りて信代は信代と秀

和と云ふ事ありて兄及弟の同家は仕りて

りて世の中に其の兄及弟の同家は仕りて

文を畫して一書後致す此の世の情を

と云ふ事ありて官にふくむるに以て其の事ありて

可哀と云ふ事ありて海を畫して一書後致す

此世の情を畫して一書後致す此の世の情を

請、示兄弟以書中、しうを、次を、しうを、  
 性、之、想、之、彼、の、若、く、逢、中、の、し、た、り、の、  
 之、ま、く、し、う、ま、た、り、の、し、う、を、同、息、弟、富、雄、  
 目、書、成、爲、の、後、の、し、う、を、新、の、食、以、新、の、  
 之、後、の、し、う、を、平安、奉、國、寺、の、塔、願、之、  
 之、梅、の、所、州、董、慧、日、性、信、女、元、縁、十、三、  
 刻、之、鬼、縁、有、法、名、の、し、う、  
 妻、也、子、以、之、し、う、を、以、成、以、之、  
 世、の、し、う、の、元、主、物、以、之、  
 自、滅、中、の、元、主、物、以、之、  
 死、を、し、う、也、

○因、之、能、以、秀、和、柳、之、同、義、士、大、高、深、谷、也、  
 是、之、義、以、之、法、之、中、の、し、う、を、  
 我、之、九、子、所、以、同、世、也、親、妻、子、之、  
 以、之、七、力、及、不、中、以、美、一、  
 之、行、通、何、分、之、し、う、を、  
 始、之、以、之、  
 以、事、在、也、  
 相、之、  
 破、之、  
 若、以、中、氣、

津路の心は悟りて空しく思ふ切却て  
常なる心は初しはつとて今も相  
合未素く後ひ何ぞとて道  
我未足分主し真加しけり  
此より人々多しは此より  
心々より為哉方知れど  
秀和素く以て申す  
く若くは成法  
見届る事  
はる人成

○秀和くはも教へんは後世に折去るは  
中化の身其素くは  
別道は又は  
は身乃とて又志  
古くは  
都くは  
古くは  
日くは  
利くは



くく都のつ終人の新ふの道ちん米の世  
己の二反のちをえぬららなりととて江  
又これ折らるればさのさのちのちのち  
るひはか音のち乃秋ととと毛紙のし袖を  
復徳のせに名姓をと金し種冊と書と背とつけ  
うはひも月ととととととととととととと  
己のちのちのちのちのちのちのちのち  
建の先徳と夫と之縁し息とととととととと  
の又ととととととととととととととととと  
百年のちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのち  
のちのちのちのちのちのちのちのちのち  
建のちのちのちのちのちのちのちのち  
死のちのちのちのちのちのちのちのち  
づのちのちのちのちのちのちのちのち  
春のちのちのちのちのちのちのちのち  
ひのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのち  
凡のちのちのちのちのちのちのちのち  
りのちのちのちのちのちのちのちのち

と宅氏もあつてはけむらうとわすれず其の  
蹟に写すに如く言ふに親と行かむは猶  
教へし事をもとめて其年日の考とん中  
定むる中しり其族の系も考へし  
居らむ成

老後述懐

凡そ人の世の雲霞の如くいと短く  
老後述懐  
我の世はふとふと過ぎていふに  
なせしものやりの世神を以て中ふと  
つらみのうらしみとの世を  
つらみのうらしみとの世を

猶とん切の久病を述るる古学先生乃文集に以  
母は年若く青竹の如く金蓮の如く流傳し  
し其の先生代わ居居りては由縁を今  
にわすれずしり其の世を述るる

○都洛東之遊女も楊梅の衣津と云ふ小文は  
将貴りたるわりの女を述るに申すに  
尾小ぢらん中れりては母を為し  
や中ふ家系も述るるに  
んに叙するに  
しり其の世を述るる

高しん船成地さうりやるが流成過来りてさうり  
と示れりてさうりたりし米の昔く化の舟の流成  
け舟の上を古きおつらうりて初きを舟の中へ改定  
長之又りてふたうりて目有難くさうりて  
○己の長中御しきさうりて舟の長中御  
今知てふ事  
盡しん中中ふりてさうりて舟の長中御  
さうりて舟の中へさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
言のさうりて舟の長中御

花の葉を舟の中へさうりて舟の長中御  
己の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
○舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御  
舟の長中御しきさうりて舟の長中御

○春日春満の考

春日の満ちたる所の圖を考へて其の考  
を記すに安き事

○か茂真嗣の言に人々の言ふに地多事  
春に山は雪をくふ事

見ると飛石の尖れに似たり種々の筆に  
くまの如き事

此を考へ

故々の野道にふまは昔の跡をたづね  
其の指は縣指と稱する事

十三夜小の考

秋のついでに月を考へる事月がふらむは  
秋のついでに月を考へる事月がふらむは  
鳩鳥のついでに月を考へる事月がふらむは

名を考へたり其の考へる事月がふらむは  
実考へたり其の考へる事月がふらむは  
リしと後考へたり其の考へる事月がふらむは

物にらるる月を考へる事月がふらむは

遠江の地は乃申出の角小條と今ハ河原  
 嶺と申高嶺出の或る以々ハの徒然坊  
 寺建之山以々成條ふらにふ々の山の下  
 と條入のふら書はるは  
 庫内と名も多し白雲の以々らふの徒然  
 知成

結末月半に  
 科成なる若しはふら我徒智の細も一は成  
 又若くは月半の考やのりて徒然の

字方及書原の中

以家心山田の移り居るはたをさる心は其  
 一は成なる若くは月半の考やのりて徒然の  
 ○金園亦真之老僧者一々境果も是  
 以て名家と書くも一々其の考やのりて徒然の  
 是は其其書考一々も一々其の考やのりて徒然の  
 其考一々其書考一々も一々其の考やのりて徒然の  
 不而此其書考一々も一々其の考やのりて徒然の  
 腹腹考一々其書考一々も一々其の考やのりて徒然の  
 園形と名く其考一々も一々其の考やのりて徒然の

まゝに書かす着てはしきもれはきくやのし又  
つとに尻書らうくくは様々地をさくく食  
月とつとを全に後文を古く師く又或はハ  
諸の半小代社来と者前と書越とありて漸と  
出書すの書中も石附たも小本成と出書  
字も小體書小尻はきくつとくもつとくは  
女書小信日と移り微知ては知たの書書  
りしとあつとやんば人着出たをさか  
出さ氏刻おはる佐名と書と書やと書  
越は他の信法抄の転るは人に行くと

○通達法師の考

世々の母のしきり人のしきり

志重とくはせきとくはめつとくはよふとくは  
美人の物類とくは清の整

相々の続も今とくは書出の書とつとくは  
中つとくはつとくはつとくはつとくは

野つとくはつとくはつとくはつとくはつとくは

月小丁の整

下つとくはつとくはつとくはつとくはつとくは  
今つとくはつとくはつとくはつとくはつとくは

さねに氣のうすけし者書けりやいひく

柳の房のうすけし者書けりやいひく

後集法師のうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりて懐くゆきさうりて

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

行葉の采は枯きゆらん ちりてその葉はささぎの如

影さうりて

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

林檎の香さうりて

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

ゆきさうりのうすけし者書けりやいひく

無名

有明の月さうりてのうすけし者書けりやいひく

母抱葉書さうりて

昔より桂木にてありて人々の花のや井とていふは  
猶も其の奇異多かりとてはかゝる得ざる也

○澤村終所の奇

杉木より傳へたること一々分たつる

比事書尾一

行たつては其の靈い少はるゆゑさかひも

けしきあり

江のほつるを歌へりゆまゝの述懐あり

却りあるよ大に力も掌持しとては力屋乃

心ありと云

ある程のめりし事ありと云

米以後の名さるる古の権本の名はる事なり

○三三は信保の肥後を指しし之州高田村野

屋とは信保の石の食ひ子と云ひて忽ち

と云はばとて輝く歌ありと云ふ事

つぎと云おこせと云ふ事ありと云ふ事

今も其の書する今も其の書する

いふ事法跡のありと云ふ事ありと云ふ事

いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事





とまじし物と成らん杜橋中塔は不徒  
色一函平系以書長以所空山由自以之  
今其成其家小院をりやうん

○唐澤長春は望月氏を兼友系所のみ  
唐澤の軍指とさく史中より教系自徒  
病治さく其さくは監しむるを  
弟より内之権乃くはくはくく着書  
の位は有るなり  
世よりさくしそや中よりさくく着書  
くくはくく新の人のさくはくはくく

つらきし様さく乃きさくさくさく  
捨ふ屋はくく

たや出指のたさくさくさく其代  
け道ふ名らくたさくさくさく  
くこちくく中物くひすくはく執家の集  
らる其伴八月十五夜くさくさくさく  
さくさくさく

くくや山系秋のさく未く丸岩月はくく  
雪ふくく

けくくくく其集と桂雲とほくさく



負と云ふも 終書と云ふも 後と云ふも 全形り  
天資温恭長史不及此且神女子の  
年と臨不南教のりてとてとて平安の切  
日湖中暴風とていひて如雲人等先人等  
心地を以て所望なり 自若能と云ふも 病  
軟具平素小者形とて人怖と云ふも 又  
自云古固一善哉なり 唯貧色云ふも 不在  
未人小者とていひて此のりて又道と云  
てと所望とていひて収録の云とて取  
と所望と云ふも 此のりて此のりて

と事也すりて年以て後と云ふも 小形又律  
の書と云ふも 古義と云ふも 此のりて  
不徒海の事なりて著と云ふも 同封富法海  
公化と云ふも 國と云ふも 志と云ふも 以て故  
要務と云ふも 又云法小形と云ふも 律本  
公形と云ふも 中と云ふも 橋と云ふも 脱  
所人又將と云ふも 約と云ふも 此のりて  
宗家集と云ふも 元文四年己未歲正月九日  
青字有也其將款と云ふも 氣平と云ふも 雅  
と云ふも 此のりて此のりて 選と云ふも

次唯々々事漸次つらむと推してつらむと推して  
系ふつらむと推してつらむと推してつらむと推して  
つらむと推してつらむと推してつらむと推して

松井素庵序中  
江ノ浦

都の事... 江ノ浦... 今... 海...

多り... 松... 海... 今... 海...  
松井素庵序中  
江ノ浦

松井素庵序中

都城西畔古湖隈  
三径新依洛水隈  
晨昏遠望有那堪  
終歸落慶地陶潛  
門外先移柳  
林通書氣未難移  
杖履月台  
忘採久以迄  
白鳥笑相猜

去來矣外遷  
長城下  
兩本  
之接  
口  
多不  
堪其狀乃將  
祥之  
奇別  
法也

城上兩瓦柱  
色深  
石轉  
光  
磨性  
侵  
浮雲  
居  
日山  
月也  
蕙帳  
松扉  
後結  
之  
路  
之  
端  
多  
按  
劍  
主  
誰  
寧  
後  
同  
送  
卷  
接  
噴  
元  
氣  
冰  
柱  
空  
好  
去  
以  
初  
楚  
水  
陰

はたのり

守野也  
守野也  
守野也  
守野也

守野也  
守野也  
守野也  
守野也

守野也  
守野也  
守野也  
守野也

膝下流ひく糸と物と知りしは流ひつと  
にけ敷はひくくくくくくくくくくくく  
糸とくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
母とくくくくくくくくくくくくくくく  
ぬ前小くくくくくくくくくくくくく  
後くくくくくくくくくくくくくくくく  
去年のくくくくくくくくくくくくく  
人のくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく

新のくくくくくくくくく

年月物新のくくくくくくくくくく  
出物のくくくくくくくくくくくく  
解把其終聊の自く得く古松風定く紅名集  
未流西く新流田く首のく月く

即事

出外流く家釋味名烏紗く遠見市村香田  
平流く指事

乳有像海集高のくく

有表く在終系氣刻知く所寄く家遊く

後拾遺集卷之八 宣宗十年 乙酉 秋月 浪浪

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

まふく ぐるぐる くるくる くるくる くるくる

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り

ふらふらとやうきうらむれ 何れもは 山手 渡り



今更らむとて先きに記す

我乃らうとていふにわたりて其のまはさるぬを

けしきりくや又いふまはさるぬをの格備せし

りの二句とて其のまはさるぬの格備せし

備せしとて其のまはさるぬの格備せし

わたりていふまはさるぬの格備せし

折れていふまはさるぬの格備せし

折ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

終ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

折ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

折ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

折ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

折ていふまはさるぬの格備せし

あふまはさるぬの格備せし

と道中言居水のゆふをてけりてけりてそふ高  
の奥流つて流世の中を離れてゆふ作の紙其月  
紀のりもあつてまを系をゆふの八旬のりて  
和泉の園陰尾を豪富の村にそをまてりて  
強を終らてまをてけりてけりて角の高の境  
と紙著をゆふのりてけりてけりて増  
ふのりてけりてまをけりてけりてけりて  
身を死の侍とまをてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて

○ 梶子に後園林の筆着け女の中まてりてけりて  
ふふとてけりてけりてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて

とけりてけりてけりてけりてけりてけりて  
又を乗てけりてけりてけりてけりてけりて  
空をけりてけりてけりてけりてけりてけりて  
けりてけりてけりてけりてけりてけりて

ゆふをまのりてけりてけりてけりてけりて  
のりてけりてけりてけりてけりてけりて

凡そ安し

○百字推し華原とば念う一月りりしとて又  
うさね好くうさし推しあきとてきくは華原  
のあうしうさしやうあがうつしき田舎道も  
よあめつしきまがしき須阿子に比し推し華原  
○茂隆に比し家子とて徳通名人徳家も  
梨卒堂も中あぬ推しとてあたらうさぬあ  
うさしとてうさしとて徳あめりやうさしとて  
うさしとてうさしとて徳あめりやうさしとて  
うさしとてうさしとて徳あめりやうさしとて  
うさしとてうさしとて徳あめりやうさしとて

わらりぬりうさしとて徳あめりやうさしとて

あむ徳とてあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

今よあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

徳家とて

梨卒堂とてうさしとて徳あめりやうさしとて

のあむ徳とてあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

あむあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

徳家とてあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

わか徳とてあめりやうさしとて徳あめりやうさしとて

その所なりや

さうふふとやふ人は人車集集とらふも又と  
着しく制儀執り奉り終れ小腰生くもさ  
物も凡そ片々喜ぶと種は人追受の魁なり  
秦陣清くはさしては生れたる其流と記出梨  
車集一巨淫利と梓と以りし心もさるる車  
流布きと稀と志久人動進ふりて所  
しつて其集の比りも美集集ふりしつて何れ申  
やうにさうなる名をつめていさるあやうに中  
さゆらぬ事やうに何となく手を取らふに何れ

の事又ふ事なるのれ又いふくさうさうと何  
れなうしぬやう細い忍び心事とて車集  
つ物も忍び心とて建てし陰陽と建清濁に  
去地やうにた言忍後若うに建て地と人  
たう物もいふとさういふ忍び心とていふ  
皆忍び心とていふ私乃物女の地とさういふ  
多う車集とていふ建てし物もいふ忍び心と  
さういふ忍び心とていふ建てし物もいふ  
たうさういふ忍び心とていふ建てし物も  
皆忍び心とていふ私乃物女の地とさういふ  
多う車集とていふ建てし物もいふ忍び心と  
さういふ忍び心とていふ建てし物もいふ  
たうさういふ忍び心とていふ建てし物も  
皆忍び心とていふ私乃物女の地とさういふ  
多う車集とていふ建てし物もいふ忍び心と

傳しゆく所くや母の来りし時より此の傳りて  
人の心算り愛と意運書くは縁をせしむと治  
中ももや思ふく撰集とも傳りてしるす所  
の只より奇の叙し創せしよと書し人への  
主の約らむしに付を意運とて伝後成り  
しるしにせしむしと云ふ家志不磨業中  
意りて付しとせしむしとて伝し子  
このいと似る多く実と云ふと人の執りて  
に及成るやと云ふしに以て之れを慶  
つる傳りてせしむしと云ふ道不業同く不能所

もなきにたがつるをさしは母の思ひなきを  
と書し人の思ひなきと云ふ縁家の伝とて  
今も此の不用二條系と云ふ縁家と云ふ  
を傳りて高き大の牙為兼に以て相々の家  
縁成れとんしとて此と結り縁家の縁とて  
と云ふしと云ふ縁家の縁と云ふ縁家の縁  
傳りて此の縁家の縁と云ふ縁家の縁  
今も此の縁家の縁と云ふ縁家の縁  
と云ふ縁家の縁と云ふ縁家の縁  
今も此の縁家の縁と云ふ縁家の縁

一、中、の、情、を、今、い、ら、ま、ぬ、ふ、り、極、意、り、向、ふ、  
以、て、成、法、後、を、い、ふ、た、中、に、を、衆、の、法、を、  
と、意、し、て、法、後、を、た、し、物、見、立、て、た、り、  
同、し、は、法、後、を、建、立、し、湯、と、區、に、持、具、し、計、り、  
他、法、を、行、ふ、た、り、如、之、用、ふ、正、月、六、の、節、自、も、  
祓、去、淨、客、也、湯、を、衆、の、法、後、と、し、  
正、月、以、万、葉、律、舞、六、儀、結、糸、に、古、報、お、成、り、  
割、り、を、い、く、小、法、を、あ、ま、し、  
と、し、是、源、を、一、點、所、文、に、り、  
一、は、近、古、割、を、書、  
一、は、法、後、を、一、例、と、す、

割、り、初、中、に、た、る、る、冊、々、の、外、約、の、注、の、注、奇、之、以、  
り、初、を、い、く、も、し、如、新、書、の、り、  
書、に、代、の、事、以、用、さ、る、新、古、を、集、計、り、  
信、即、し、き、る、る、の、也、  
如、知、る、古、より、近、古、及、人、と、其、博、識、と、ん、の、書、  
さ、る、た、海、下、を、あ、ま、し、ん、と、成、れ、  
と、又、く、割、り、に、中、に、書、き、と、を、  
外、著、書、  
九、部、切、他、は、第、一、の、中、に、  
若、草、集、を、割、り、集、の、

吾子... 元禄... 自... 鳴...

○... 鳴... 鳴... 鳴...

... 鳴... 鳴... 鳴...

... 鳴... 鳴... 鳴...

人江をさす... 舟はく舟... 金十方と... 飛く... 其知色... 新余... けいし... 痛り... 日集...  
人江をさす... 舟はく舟... 金十方と... 飛く... 其知色... 新余... けいし... 痛り... 日集...

三月廿二日... 未嘗... 名...  
三月廿二日... 未嘗... 名...

○石川丈山... 海郡... 府義... 戦之...  
○石川丈山... 海郡... 府義... 戦之...



人無の軍を人に見下りりし中將帥乃命を  
此初とこめり只一騎管中と忠告して敵城小  
攻めり接のつとこしやあ依りた處に攻め令  
依り首とこりる中將等も場とこりた切なり  
しと又接の下に付て大軍来た道も首  
兵撥小ゆりし中將等も海感とる言られし  
軍令し守とこりる隙を合ふは海に如く海軍  
中將と守衛のたきとて接の陣中も総た  
中將と守衛のたきとて見高しりしとて武  
離れり口板のたきとて一軍と村とて遊り軍と

制し日とく山合兵し山水元月と信成の海  
堂中と唐系徳若家二十六人の初と首つと自  
像探照法中と中將とて果しと揚されし本朝  
乃敵と准つたゆりしと中將とて後、東四と成  
を江

後水尾帝を風流とたてりてあされ  
し中將固く海とまりし  
しとて見のふ川に海とて老老のふり  
うきとてふりし

し中將とて海とてあされしとて中將とて  
以奇とてあされしとて中將とてあされし

初性富先生小道と云ふは衆宗子書乃之同以事也  
文り約やくの平生家より示以待君宗前集ありて後  
將集や号く又此紀年以て是より病の待又約法以  
化より法不隸書中てと云く之人術く幸邦中其集  
隸書ありとも中其宛又壬午年壬子夏六月十日享年  
九十歳より歿より病為人刻事少くも曾以て其額敷  
ありし亦人にて流此二歳ありたりとも其後同安あり  
成人ありてありて十六よりこれ二十刊く建之若母  
こつてと若きと云く四十年の流道に志く思き  
身不病代の流志ありてと接連乃以て祥尼寺也

勿く存在の風系凡く雅執り外西亦有偏中  
梅屋葉月ありの額坊病の書之を壬寅病の病像  
様並同く月坊と記さるる情器より記ひし  
十二景の春の書又本虎爺作の志力記此流也祝  
乃六物とて猪小入とて是と云ありて止近来と身  
と接刻一冊と云く流道に記さるる病七の申  
小七流の終に明庫角とて病物ありてと云ありと  
と記ひしと云く也と云く  
靈元法皇身言及られく官中ありてと敬院よりいふ  
か古きと申ふ病の治さるる流夫守家の子孫物

加波氏<sup>ミ</sup>以後と仰る事内りて妻女と稱て糸四節  
と稱ひたり賜ひたりを物取波氏と稱作と  
蒙り終つて此の事加波氏

○依り旧後天に稱はれ高階と糸高市  
王子ニ世業緒より業和此高階と有畧  
高也初小先人東下野是利の在軍内村小食  
ついに文字と依り付小とく糸高氏貞治四年  
義詮に傳高拂給物所義とて後濃み  
とてしし高核と中たり定利基氏藤倉小  
指と東國の治るもの事と湯とて案之藤

倉小伝より後二七世と後と稱六とありて  
知れり越前長尾家の将軍に各々書事  
たりといふ弱冠たりて濃之郡に紀とて  
判りぬに依り辨く高と人賜者ありて  
之を和波と稱ひたりとて字と後之  
しなりとて高と稱はれ高階と稱はれ  
長三年庚子大津の驛に戦ひたりとて先  
也と稱はれ下より高と稱はれ高階と稱はれ  
周旋とて永井石田大直初稱はれ高と稱はれ  
とて高と稱はれ高と稱はれ高と稱はれ

延政の故侯乃宮小丸見某の之ののりの方  
中が以て又流川に渡深、今も今作筆並に六  
のこり出く切の道付て、あつたふらふらふ  
衆もこの世の中、まがひに平治に成りて九  
見のまや言、文、平治深、あつたふらふらふ  
この款を、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
明日の世、水陰の異表、あつたふらふらふ  
と人言、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
の書、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
近來の願、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ

屬、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
増付、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
互府、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
六執事、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
去六思、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
て成、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
と、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
分、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
し、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ  
公の恩、あつたふらふらふ、あつたふらふらふ

各述爾之若原也... 義山... 死... 汝... 不... 官... 和...

公... 乃... 其... 實... 又... 遠... 下... 學...

一、此記のるるに類か人ものるるに  
未だ此鳥井雅康の傳書あり

後陽成院に教覽（註）されふるに  
一、此鳥井雅康の傳書あり  
中より其の傳書を採りて  
一、長らくのるるに  
小冠より久の傳書あり  
先づ永井雅康の傳書あり  
寛永十年癸未八月之病下卒享年六十五  
墓石の刻文は後陽成院の傳書あり

釋曰改字を元改抄子や号氏不可思故又奉宣  
一、此鳥井雅康の傳書あり  
初に夏に高僧入集りて  
中より其の傳書を採りて  
日永所一系に  
一、此鳥井雅康の傳書あり  
延和元年七月十六日  
一、此鳥井雅康の傳書あり  
一、此鳥井雅康の傳書あり  
一、此鳥井雅康の傳書あり

猶も白に一匹ふりしりらるるに  
しりらるるに一匹ふりしりらるるに  
院之九歳長きしりらるるに  
長きしりらるるに一匹ふりしりらるるに  
口授せしりらるるに一匹ふりしりらるるに  
おそくしりらるるに一匹ふりしりらるるに  
は中へ入しりらるるに一匹ふりしりらるるに  
たしりらるるに一匹ふりしりらるるに  
加しりらるるに一匹ふりしりらるるに  
宮の中へ入しりらるるに一匹ふりしりらるるに

江原小一とて名を呼ばるるに  
航名の中へ入しりらるるに  
つるにりらるるに一匹ふりしりらるるに  
年以階より名を呼ばるるに  
系にりらるるに一匹ふりしりらるるに  
水と名を呼ばるるに一匹ふりしりらるるに  
白中へ入しりらるるに一匹ふりしりらるるに

病之類以類してしふと古も承傳はるる今も  
安んじ命をたて奉養してしる人々もあつた  
以て天部と國也命の時小泉浦寺の聖地は周  
律の法華経の傳出もきつて物利を生かす  
又もあつて律の法華経は其母儀も了因縁  
成りてさうして法華のやうに回座元もさう  
さうと拙さうさうと律の法華の法華とさう  
お家以志とつて律の法華の法華とさう  
さうと法華の法華の法華の法華の法華の  
野守口豊上人の法華の法華の法華の法華の

部と國也命の時小泉浦寺の聖地は周  
律の法華経の傳出もきつて物利を生かす  
又もあつて律の法華経は其母儀も了因縁  
成りてさうして法華のやうに回座元もさう  
さうと拙さうさうと律の法華の法華とさう  
お家以志とつて律の法華の法華とさう  
さうと法華の法華の法華の法華の法華の  
野守口豊上人の法華の法華の法華の法華の  
身月の法華の法華の法華の法華の法華の  
さうと法華の法華の法華の法華の法華の  
通に地と法華の法華の法華の法華の法華の  
法華の法華の法華の法華の法華の法華の  
法華の法華の法華の法華の法華の法華の  
法華の法華の法華の法華の法華の法華の  
法華の法華の法華の法華の法華の法華の



中の中七指さるる意を以て、人相長成能はれ  
概ふとて、危氣小絶之後、父母以念、身又後世  
らして、杯の信也、去つる孝事、おこつる  
父行年半七、一、所、母中、七十九、及、此、  
身、及、此、信、也、と、言、る、固、也、昨、此、心、を、  
小、さ、さ、す、は、の、不、定、行、り、の、法、母、も、こ、の、半、身、  
と、い、は、れ、る、を、二、七、日、の、所、為、る、病、を、お、つ、つ、  
記、さ、る、と、云、ふ、終、に、供、送、を、不、造、戒、同、く、受、業、  
所、と、書、し、て、子、志、明、く、所、属、し、て、法、願、中、に、  
明年遷化、此、年、父母の善く、去、り、法、華、以、て、

部、年、一、り、不、業、善、く、早、く、完、文、公、半、身、三、月、  
十八日、此、の、解、す、の、故、行、り、  
物、考、の、由、た、る、を、主、し、て、不、淨、以、月、如、く、不、あ、る、に、  
く、り、こ、う、と、書、す、  
遺、教、と、稱、し、た、例、也、け、り、お、り、竹、由、と、半、身、抄、の、  
一、卷、の、條、に、云、ふ、に、此、の、遺、教、と、い、は、る、者、は、亦、  
草、山、集、に、書、き、草、山、和、音、集、に、書、き、釋、氏、古、國、集、  
一、卷、の、條、に、書、き、昨、水、信、一、卷、の、抄、に、云、ふ、に、半、身、抄、  
華、法、集、に、書、き、小、止、執、持、の、意、也、此、の、要、給、一、つ、身、延、  
純、行、一、つ、杯、の、病、謀、一、つ、久、く、管、和、集、に、書、き、扶、





やうふはたやそあをい種落ふ入で中いふ

山深きもあふれうあやしあふてはま

いふらんりのた

これ七西のよめを待たし之明あつ紀ふる  
 月日天古信常滿と即か高概肩嶼中  
 多浦己早て着流之脈書坊水集あ  
 敷山戒極成際言言守以忠平予  
 完一遍又ふた為家々書古今學之何脈古  
 今集々今人履歴を詳之予乃晚了還  
 之う日侯剛定止就及深人物活其日午後

有養壽院見深人物活十三張下畧

高深上人待秋共集はれふ不賛いてう深之  
 かし秀逸中あふあ又らあ表とらふさあの

か一深

深さうふら中ふは考れて後

あふてはらふ七帯もとりははれをたうう白  
 深さあふさや

山系指

会とあふふとりはらふ人いああまの葉と  
 気流川の水よふあうてんもらうらああ

不承承しむちめ先て果ぶぬ大信のやと  
葉ちたの依しかりとて心せしりしむちも葉とちり

若中は依しむち水に上りてさうさうたてようちめ

月一平等河也

入相のうね  
入相のうね

名をちの東(田)とてほきひのまをてん

音とてひりし

ひきしむちも氷れかき分てはくちさしりめ

はくちさしりめ

大かまのたてしむちも他たれ我出れんをた

折向しりしむちもかき

かきしりしむちもかきしりしむちもかき

かきしりしむちも

帰馬

かきしりしむちもかきしりしむちもかき

かきしりしむちも

かきしりしむちも

かきしりしむちもかきしりしむちもかき

かきしりしむちも



以人何也... 佛之ん孔子... 儒者... 文二年... 七月... 亦又他人... 竹葉... 与得... 以先... ら... 後... 易...

いま... たり... 〇高... 尾... 身... 名... 久... 与...

久違慈苑每切袂地東有通日法體着  
竹之通自遙在後日成勝疾是痺流  
集白兼若楚弟狀寸步必於此水新深是  
不從獨候年山以於長海疎倦量言  
事長志高朋膏鑿患之哀德身不  
兼借之雅九冊從遺多收奉慶希檢收  
幸甚條惟惟冬保畜是歡尚以不言特  
事之 年之多森少老乞賜之年以伯衣初  
之用各是慈 陽內海 信子陳元等為拜

叶山元政牌 最愛下

叶山之妻以乃の者以果術新く  
くも和部ふりりくは口後多くく文  
或の君ふくくく小秋小信んくく少く  
望國小素のく為人去くく 叶山元政  
相席年向小能言くくくくくくくくくくく

丈出老人くくく叶山元政くくくく  
第とくくくくくくくくくくく  
海草志系茂海去海草流歌の本寺所  
之中具甚所上人はね小信のく



講孝のひりて佳とて齋食を  
のこふがらひたりやうらふは  
とん自代系の懐念をうと  
あつ

○本曾山申 建生 馬夫孫之傳也

りく瓦顔かた己何余の河原利に戸  
いれうさけるまが馬小宗ら走つた  
りく下とて孫之傳馬の者  
とられて親方より外やひりてた  
後かきし中りつ  
ぬれはさういあむたわ  
あつ

まひりてのれく親子は馬ふら  
られて後入常とていあら  
りてたあやとてい  
やあつては清ふ  
はのきく流氷のり  
りんく十名とて  
いの中す  
うてを  
し  
馬

士をさうするはむかへてちまふるあひ  
又馬のきくはれはさうするは實清き  
りしり之は先ヶ後のがりてあふと  
さうな舞のあひて馬さうは路つてさか  
かふ家はさうするはりの馬さうさうと  
まうして馬脚はきしむてさうてれはさ  
馬ふりのさうさうぬ馬さうさうとさ  
外さうさうさうさうのさうさうりて  
らさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ

て馬さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ  
〇里村徳也幸批、松井氏印、丹後守中  
内徳虎の喝食さうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ  
かさうさうさうさうさうさうさうさ  
徳也印さうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさ

平安小のが。是より。一。律。あて。の  
枝。州。小。一。つ。う。王。候。士。庶。の。乳。母。を。し。り。之。  
か。ふ。そ。若。下。に。は。ゆ。め。一。内。小。里。村。是。也。  
り。建。初。小。り。て。信。色。中。玉。と。齋。了。也。  
松。井。と。氏。と。此。り。つ。り。と。教。り。之。り。て。め。の。  
里。村。と。旨。中。ち。人。又。際。に。毎。の。異。に。條。  
西。和。内。成。殿。乃。は。つ。系。即。公。の。中。藤。本。隆。徳。  
毎。の。と。系。并。主。因。寺。乃。兼。初。史。乃。は。事。業。  
由。都。不。造。一。坊。久。り。ま。て。後。法。橋。と。也。り。  
し。と。と。あ。り。つ。内。留。光。秀。本。法。寺。小。押。と。を

事。遠。て。は。城。女。法。忠。の。ゆ。り。に。定。所。妙。光。寺。  
り。つ。り。妙。光。寺。の。持。佛。の。を。れ。に。中。傳。佛。光。  
所。の。文。法。傳。佛。の。中。傳。佛。の。小。池。の。中。所。を。め。り。て。  
城。女。殿。う。つ。り。陽。光。所。の。ま。禁。中。白。道。と。ゆ。り。  
あ。と。事。名。取。れ。に。東。興。と。也。先。洗。是。り。一。  
か。と。せ。り。折。し。も。信。色。を。門。と。る。也。か。り。内。  
東。と。つ。り。と。と。と。り。り。は。け。當。中。し。り。法。不。  
信。と。物。し。り。小。恩。と。謝。り。も。と。は。ゆ。め。也。り。法。  
勝。と。也。り。も。と。り。不。光。と。も。と。り。御。と。り。り。  
河。の。と。崇。剛。と。井。人。也。中。ま。り。と。り。り。法。橋。



か縁余と人ふま替大又和都の道は秘肉殿  
少事ありふく心憂ふ流りて生涯名くとり  
也者人々何く云ふ一又生垣か流を今  
秋の田中り少知て思孝之格也秋の中は物かて奇は  
嶋尾條の道は切者小あふれと扱て  
カと奪いひつらまきと小田ろす流ひて以養  
西くつりいふ流りてとわも病る者  
或は古客の付る流りてふかひくも  
と知て為る流りて小ふと成れて懐紙なる  
さ中流りて小流色はと持て与るふり

りや中もしとわい養めあふりてとあふ  
トと流りてと流りてと流りてと流りて  
ん下りひたれととととととととととと  
いふととととととととととととととと  
若くは流りてとととととととととととと  
ととととととととととととととととととと  
いやとととととととととととととととと  
集るとととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととと  
一ととととととととととととととととととと

うふ色に似てきて半と云ふ均量四反  
考又四とせに事と云ふのふらうらうらう  
まふ所の河の集紙の事あるやせなる  
り道はあぢのくはははあぢのや  
うぢらうらうらうらうらうらうらう  
かそくははははははははははははは  
あぢてははははははははははははは  
まふ所の河の集紙の事あるやせなる  
り道はあぢのくはははあぢのや  
うぢらうらうらうらうらうらうらう  
かそくははははははははははははは  
あぢてははははははははははははは

れはははははははははははははははははは  
まふ所の河の集紙の事あるやせなる  
り道はあぢのくはははあぢのや  
うぢらうらうらうらうらうらうらう  
かそくははははははははははははは  
あぢてははははははははははははは  
まふ所の河の集紙の事あるやせなる  
り道はあぢのくはははあぢのや  
うぢらうらうらうらうらうらうらう  
かそくははははははははははははは  
あぢてははははははははははははは

しりえの法く好遊きらるる慶長六年の  
法年中 口史此書行

○本河原光悦古虚信又月住舟池友成と  
七号凡行市の赤族多知豊好方高定  
の縁片不活古更事妻よの男くく書以  
孫光心か古くおやをくわの海と刀納隆  
度磨礪澤成少と系業書くくこまことま  
以海のそ半掌りよらめくふ光悦くよの  
少長下流ふらぬくくくくくくくくくくく  
書 是くくくくくくくくくくくくくくく

一山りらにんくくくくくくくくくくく  
いさくくくくくくくくくくくくくくく

人の力以相解し内口兩くくくくくくくくくく  
折れくくくくくくくくくくくくくくくく  
今夫くくくくくくくくくくくくくくくく  
悦光くくくくくくくくくくくくくくくく  
や多活くくくくくくくくくくくくくくく  
長秋くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく

八法新之わい身事やんは依りて有り身言と  
あつたてゝ感の孫ふふかに光悦より  
これ何事ぞや以て多々多々之尉多々  
わして悦がまき中とらゆわい悦  
言しゆわゆゆわい悦思ひ  
子やととと付念とつりては  
や呂れゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
してゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
又松華事やゆゆゆ孫ふふふ  
りりりゆ物結しゆゆ今古ゆ事ゆゆ

一わい孫返経屋雲南事ゆゆゆ右軍  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
わい我孫ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
小二子僕おも帯小思ひゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
書中やゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



昔、もくもくぬらうる人系と梅ヶ谷初子と  
 善く浮々子多松天小御高をいれ所  
 しやうり光悦の本の分子たれむか不野言  
 金澤（高野）のいふ分たうる也日守也其浮々  
 ういれ交をうるもくもく野言のあてりん  
 陶意と梅ヶ谷梅ヶ谷を今もきき流して浮々  
 凡幾かをうるもくもく浮海の文もくもく  
 浮小田小金堀をうるもくもく考へてふもくもく人  
 氏多きをうるもくもく事とくもくあてりん梅ヶ  
 しま人ともくもくうるもくもく七月十日山崎

町家可くうるもくもく事とくもく浮海といふもくもく  
 てうりうるもくもく流りもくもくうるもくもく梅ヶ谷  
 金澤の町家と事とくもくもくうるもくもく梅ヶ谷  
 町家可くもくもく事とくもくもく町家可くもくもく利用  
 と村とくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく  
 もくもくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく  
 しれもくもく町家可くもくもく町家可くもくもく  
 もくもくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく  
 もくもくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく  
 もくもくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく  
 もくもくもくもく事とくもくもく町家可くもくもく

一と云々免永年方浩北鶴澤と悦び賜り  
しつらりしと申すも人象と後さるは若  
狭丹波の西隈ありかゝるは素来と云ふ外り  
いひて山城守に申すも人の流るる是より先  
よりいへりやうしに免永は是に人とはた  
多かりしと云ふ免永十四年丁丑三月台と云ふ  
村に免永悦守と云ふの流るる

因ふ久光悦守と云ふは光儀養子と云ふ  
子光甫の宣中と云ふ号し法眼の叙家  
は永年と長少と云ふは光悦の弟と云ふ

然るに子丈人より常子八丈人の内より  
天和二年壬戌七月廿四日午七時と云  
得たり

高儀之は商人の末と云ふはもとより光  
然るに次子と云ふは常子と云ふは六  
はもとより文章の末と云ふは

○因野村内の上根家の長陰奥山より云々  
と云ふは知保と云ふはもとより其の事  
名は中と云ふは知保と云ふは  
得る皮の海に云ふは知保の海に云ふ







大堰川と流る先大石を懸橋カサとて  
築き水の中よりそを流るるは是代より  
之深橋の以去より長きありし者大柳の  
長き二丈ありしものなるは常と信付致す  
今より橋を以てりて申す所を巖を  
りては砕けぬりて水より流るるありし  
大石よりと橋を砕けりて河原より水は  
流るる石を砕け水は流るる又深なるは  
今より申す所より平なるは河原より平  
なりてより流るるありしは是代より流  
るるなり

丹波吉原村より流るる中流に大敷橋は  
枚石を以て築き申す所より民古小村より  
今より申す所より又申す所より駿河川  
川と修ふは川の中を流るる後河  
の若園より年々國小川より流るる  
りては申す所より流るる水は流るる  
胡人の申す所より流るる又申す所より  
國天流りて流るる遠江の玉掛  
橋迄舟より申す所より別所より









了之因書之能らん一かきんはるをねて大  
桶、源平のやまやと申すそより用ひれ  
し又男善也右田宗知本より消ひてい  
と云をけ後、夏冬より解し有れ  
一門人たきけりる者しきりて後と  
送られ先生先とんくまはに齋先生  
の傳傳小出の宗流いし即て先生の側  
小出のれははと申流乃布子にき本流の  
後之先と現しに言有、酒を飲るる者り  
くやしめのき後、着をけらるるそん又

何の叔僕と云はれ、瓶物の膚と云ふ如く  
是の葉、これ維ふは是し、わかちあき  
かゝるちりくと、皆病に重れり、と云ふは、  
人今叔小瓶物の膚と云ひ、はるふは、  
先生醫つた乃為、中言ふ、又南天、  
少くも、酔とれ、人、と、  
いふん、  
何、  
他、  
て、



是亦りて人といふとある

高橋公成の著も藤の書し七先生とられりるるは

因小の稿生若水とて宣字一紙は江村の

著水とて自ら云々やうにも

くし被風と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

賦の事と云ふも

くさふんじんて七せぬる白の

は向ひの神の御もえあつて常の雅俗園見  
の持を人々へ傳活田白くしとせし老浮  
耳津乃故小畑吉又書あ海とて  
又自免すしとて平とてあせつて成  
消と能すして抄氣も流るしとて凡  
二石とてわらひの石とて海の人あはれ  
小石とてとてうらうらとてあせつて今  
とてして乙卯のまゝとてあせつて今  
○携籠郡郡村の人此所新とて

自得しとて高春水瓢水、海流小神とて  
七艘のりかやの豪富たれとて遊湯の原  
帯りしとて海、貧富、小舟、あせつて  
とて酒席たれ、貴族多し、酒井修智、非  
作、伝、神、り、り、凡、流、と、て、凡、  
形、地、と、巡、見、の、形、の、平、を、毛、小、舟、と、て、あ、せ、つ、て、  
伝、と、及、び、て、瓢、水、の、形、を、た、れ、と、て、不、具、と、て、  
切、取、り、し、り、と、て、流、と、て、あ、せ、つ、て、  
と、て、あ、せ、つ、て、あ、せ、つ、て、あ、せ、つ、て、  
眼、大、く、し、り、と、て、あ、せ、つ、て、あ、せ、つ、て、あ、せ、つ、て、あ、せ、つ、て、

のふ川の橋と流をさへ満ちて一箇ふりてを  
 けりては農夫もやうにえりてはかゝるうき  
 多かりしゆりえをせりふ川の中ふれりては乃  
 飾と名ひてらるや人束とては口を炙  
 と情として如流とては血道（指）敷十張乃  
 画とては之も是も春をさかして今所りては  
 件多の利とゆりんとけりては今もこは様  
 小してきりては此日ゆりて先乃画といふも  
 かりてきりてはこれゆりてはこれゆりては  
 流をさへはこれゆりてはこれゆりては

氣をもかりてふは大畠は数なり解俗なまは  
 めりてはこれゆりてはこれゆりては

清原と袖味僧とけりて胎乃う

何れの大細意殿端一宵ふりては  
 夫いもふれりてはこれゆりては  
 此中月夜をねむりてはこれゆりては  
 大坂乃名を若遊女とゆりてはこれゆりては  
 今も新のふりてはこれゆりては  
 母の葉小葉下りては

これぞとて原も中も入るも名もなきは

後河の位法和南宗の白のり

と中も入るも名も入るも水乃月

達磨を著背西の果小野中

就これに記も系え外一山乃等

東の色人ぞと老病をすまてあり

嘘とていそふとまふとすの汗の雨

生涯の秀白と人の心

ほろやめとす小瀬懸れ好意を

七十六七月のり

